

万葉の地学 砂嘴（さし）片男波

南 寿宏

大相撲に、片男波部屋がある。片男波の由来には諸説あるが、その一説を。

波には、男波と女波の二つがある。その片方の男波が片男波である。ある相撲関係者がそのように誤解し、相撲の部屋に片男波部屋と名付けたとさ。チャン、チャン。

冗談はさておき、万葉集巻六919が次の歌である。

若の浦に 潮満ち来れば 潟を無み 葦辺をさして 鶴鳴き渡る 万葉集 巻六 919 山部赤人
わかのうらに しほみちくれば かたをなみ あしへをさして だづなきわたる

ここに、「かたをなみ」というのは、「かたがなくなるので」という意味。「を～み」は受験古語の必須である。崇徳院「瀬を早み 岩にせかる 滝川の（後略）」はご存じ、百人一首77。

赤人の歌は、「和歌の浦に潮が満ちてくると潟が無くなり、葦のほとりに向けて鶴が鳴いて飛んでいく」と訳される（拙訳）。



片男波は、和歌山市南の和歌浦湾に伸びる砂嘴である。和歌川からはき出される砂礫が湾流に流され、直線状に伸びたものと考えられる。砂嘴の先端が陸地に最接近すると、砂州と名が変わる。天橋立がその一例。

砂嘴および砂州は、地学事典によると、次のとおり。

砂嘴 spit

岬や半島から海へ細長く突き出た砂礫の州。サンドスピットとも。一般にその先端部は多少内湾側に湾曲する。表面勾配は外洋側でやや大きい。砂嘴の形成中に波や沿岸流の方向が変化すると、その先端部の内湾側に小さい分岐の生ずる場合がある。これを分岐砂嘴 (recurved sand spit) という。伊豆半島西岸の戸田湾口や四国小松島の和田ノ鼻などは砂嘴の例であり、清水港を抱く三保ノ松原や北海道根室の野付崎などは分岐砂嘴の例。

[茂木昭夫, 地学団体研究会編 新版地学事典]

砂州 bar

砂嘴の一種で、湾または入り江をほとんど閉塞するもの。湾口を閉ざすように形成されたものを湾口砂州 (bay mouth bar)、湾の中央のものを湾央砂州 (mid-bay bar)、湾の奥に形成されたものを湾頭砂州 (bay head bar) と呼ぶ。宮津湾の中には長さ2 kmに達する天橋立の湾央砂州があり、久美湾は湾口砂州で閉じられようとしている。

[茂木昭夫, 地学団体研究会編 新版地学事典]



砂嘴 和田ノ鼻・三保ノ松原 湾央砂州 天橋立 (国土地理院HPによる)

天橋立は万葉集には歌われていないが、百人一首に小式部内侍の歌がある。

大江山 生野の道の 遠ければ まだふみも見ず 天橋立 百人一首 60 小式部内侍
おほえやま いくののみちの とほければ まだふみもみず あまのはしだて